

ガンマドヴァと山伏神楽—継承の視点から—

J. A. ナンダナ・ジャヤコディ

A Comparative Study of Gammaduwa and Yamabushi Kagura

— Continuation and Preservation —

J. A. Nandana Jayakody

Superficially, it appears that certain traditional components and cultural features diminish due to the modernization of societies. However, in any period, it is impossible to prevent the changes and disappearances of cultural features in a society. Although traditional cultural features can be preserved through reconstruction, it is impossible to protect non-material cultural features through reconstruction alone.

The current study is focused on the preservation of the non-material features of the past examining two examples from Sri Lanka and Japan. The main objective of the study is to examine the role of the state and village level organizations in transmitting these cultural traditions from one generation to another. The principle methodology used here is a comparative field survey.

The Gammaduwa in Sri Lanka is a traditional ritual that makes offerings to gods and deities in return for their blessings, and for protection and prosperity of the village.

Kagura is a folk ritual which has evolved with Shintoism Buddhism and is indigenous to Japan. The Kagura form has been transmitted from generation to generation and preserved for two purposes ; (1) as an offering performed to provide blessings to the village and country and (2) as a traditional cultural feature that depicts the identity of the nation.

There are many features in the Yamabushi Kagura that are similar to the Gammaduwa in Sri Lanka. However, when comparing Gammaduwa with Kagura we can discern two main differences between the two countries. First is the lack of interest in Sri Lanka by the state and the people in village rituals, and the recognition that they are important components of Sri Lankan culture. Second is the lack of understanding about the importance of preserving traditional heritage among Sri Lankans. In Japan, there is an awareness that folk ritual and folk dance are features depicting the cultural identity of the country. Today, due to the fact that the majority of people in Sri Lanka have forgotten folk drama and folk ritual, collective village level entertainment is on the decline. Indeed folk rituals are regarded as a means of finding solutions to the social and economic problems of the country.

Our investigation in Japan makes it clear that Kagura differs from one prefecture to another. However, when we look back 100 years at both these rituals, the changes that have taken place in Kagura are insignificant. The maintenance and continuation of Japanese folk dance and rituals have occurred because of the use of modern technology. As a result of technology, cultural features that were limited to the village have now received greater publicity and prestige. In order to save the traditional structure of Gammaduwa, in Sri Lanka it is emphasized that the steps taken to preserve traditional culture in Japan should be used as an example.

はじめに

400年以上にわたり西欧列強の植民地統治下にあったスリランカが、1948年独立した。独立後のスリランカでは、植民地統治下に浸透してしまった西洋人への精神的な従順が、社会全体に西洋崇拜という負の遺産の残渣として、急速な社会発展へ影響している。その結果、近代化は新しい文化を誕生させたが、同時に消滅していった伝統的文化があった。伝統的なものを田舎くさい、洗練されていないとして蔑む傾向は、明治期に脱亜入欧によって近代化をはかった日本にも見られた。しかし、日本が敗戦後の急速な経済発展の中で伝統文化を伝承保存しようとする努力が結実している点は、途上国スリランカにとって学ぶべき点であると考えられる。また、独立後スリランカが近代化と経済発展の過程で、有形無形の伝統文化を通して精神的にも物質的にも脱植民地化を模索するなかで、日本モデルは必ず参考になると考えられる。

本研究は、脱植民地化に伴った急速な近代化の潮流の中で、精神的、物質的にも見失いつつあるスリランカの伝統文化を伝承保存するために、先進国日本の民俗芸能である山伏神楽をめぐる地域社会の事例とスリランカのガンマドヴァの文化人類学的視点からの比較研究を通して、手がかりを得ることを一連の研究目的とする。

研究の方法

本研究は日本の山伏神楽とスリランカのガンマドヴァ (Gammaduwa) についての事例研究である。スリランカのガンマドヴァと日本の山伏神楽は、神々に五穀豊穡や無病息災を願って行われる民俗芸能で、神々に関する物語を音楽、歌、踊り、会話などを通して演じるものである。

山伏神楽については、岩手県大迫町内川目村の岳 (たけ) と大償 (おおつぐない) という集落の神楽の組織者、祈祷師、他の仕事に関わっている人々に対して参考観察調査を実地した。また、近代の社会変化がその関係にどのような影響を与え

ているのかを調査した。スリランカにおいては、ガンマドヴァが行われる地域からコロンボ (Colombo) とガンパハ (Gampaha) という県 (District) を選び、ガンマドヴァの現在の存在形態と社会変化と共に、どのような変化が見られるのかを調査した。神楽やガンマドヴァの背後に存在している組織の人との交流、民俗宗教との関連を調べた。

被調査者としてガンマドヴァと山伏神楽に関わっている祈祷師、観客、組織者、祈祷師兼組織者という4つに分類し、面接調査を行った。日本とスリランカでは被調査者の数は60名ずつである (表1)。面接調査によって得られた情報に基づいて調査項目を作り、アンケート調査を行った。被調査者すべてに記入してもらい、数量データを収集した。

研究史

スリランカでの伝統芸能に関する研究には、スリランカの民俗芸能の歴史的背景と演劇の関わり [Sarachandra 1952]、ガンマドヴァに祭られる主な女神パッティニとその信仰の由来 [Obeyesekere 1984]、パッティニ神信仰の衰退とカタラガマ神信仰への移行の背景と原因からガンマドヴァへの影響を観察したもの [Obeyesekere 1982] がある。しかし、研究全体の蓄積は決して多いとは言えない。

一方、日本の山伏神楽に関する研究は多数あるが、そのなかでも本田安次が第一人者であり、戦前から戦後にかけて山伏神楽と番楽を比較研究した [本田 1942]。

1. 歴史的背景

ガンマドヴァとスリランカの民俗宗教

現在スリランカの人口の約75%を占めるシンハラ人は一般に仏教徒であるが、民俗芸能の背景にあるのは必ずしも経典的・制度的・理念的な仏教ではない。それは、仏教が伝えられる以前からあったアニミズム的な性格と、理念的な仏教とが融

表1 ガンマドヴァと山伏神楽 (被調査者)

年 齢	祈 祷 師	観 客	組 織 者	組 織 者 ・ 祈 祷 師	合 計
ガンマドヴァ	17	19	19	5	60
神 楽		30	15	15	60

合した民俗宗教として捉えることが出来るのである。

一般の仏教徒は、仏教の教えに従って善行をし、徳をつむことが奨励されているが、一般の人々にとって、日常生活における宗教的な欲求を満足させるには、いわゆる「純粋な」仏教による宗教的実践行為だけではもの足りなかった〔Saratchandra 1968：1-2〕。そのため、スリランカの民衆生活には、アニミズムと仏教的な観念や実践が融合した民俗宗教が広く見うけられる。その中には、本来釈迦に関わりのない数多くの超自然的存在や、それに関わる儀礼が見られる。一般の人々は、こうした儀礼も同じ「仏教」として受け入れているのである。

紀元前3世紀にスリランカに伝えられた仏教はアニミズムの浸透していた文化的、社会的状況下で位置付けられ、アニミズム的なものは仏教的コスモロジーの中に包摂されていった。

ガンマドヴァにおけるパッティニ神

スリランカの民俗宗教における神々（デヴィヨ）は、南インドに由来するヒンドウの神々が仏教的な世界観のなかに包摂されたものである。前世で数多くの善行をつんだ人間の生まれ変わり、その神々はやがて仏陀になること、あるいは輪廻から解放されることを目的としている。スリランカの低地で収穫感謝を祈る年一回の村祭りのガンマドヴァで祭られる主な神はパッティニという女神で、スリランカの農民の間では有名な神である。その信仰は、2世紀頃から始まったとされている〔Adikaram 1946〕。パッティニはドラヴィダ系の女神で、南インドのタミール人の信仰する女神に属する。19世紀になると、全国様々な地方にパッティニ神社が作られた。特に天然痘、水疱瘡、ペストなどの病気を治し、予防の神として知られ、さらに雨乞いも祈願される。その一方で、悪い行為を徹底的に糾弾するとも考えられている。

ヤカ（悪魔）

ヤカ（悪魔）というのは、神々とは別の悪霊的な存在であり、神々に比べれば低位に位置付けられる。ヤカは、仏教伝来以前、人間の肉を食べて生活していたが、仏来によって食生活や行動を変え、釈迦の命令に従うものとなった〔Geiger 1960〕。そして、自らの恐ろしい表情で暗闇に一人での

人間や孤独な人間に取り付き、彼らの精神と身体をいたぶり、病気や不幸を引き起こすが、その病気や災いを防ぎ治すために人々は悪魔払いなどの行事出でヤカに食べ物をあたえ、満足させる。ガンマドヴァの中に出てくるヴァーハラ、デボルのような神々は災いの原因であるヤカを退散し、無病息災を与える。

神楽と日本の民俗宗教

私は、組織化されなかった数多くの宗教的な習慣が地域的な差異を伴って存在するのが日本の民俗宗教ではないかと考えている。この中にある様々な性格はスリランカの民俗宗教の背景にもみられるアニミズム的な性格と共通している。日本のアニミズム的な性格は、後から伝わってきた仏教や、神道、修験道の性格と融合し、現在の日本の民俗宗教を形成しているのではないかと考えられる。

神楽において注目されているのは農業に関する山の神信仰、田の神信仰、水神信仰などであるが、山伏神楽で登場する山の神、水神、海神、五穀の神などは、仏教、神道、修験道などより、以前からあった自然崇拝を含むアニミズム的な信仰の反映とみなすことができる。

山伏神楽の1つである早池峰神楽は早池峰山への信仰を中心としている。早池峰の山の神は、村落の人々の農業や他の生活手段に適当な天気を与え、山の上から彼らの暮らしを見守っていると村人に信じられている。又、神楽を行なう時、その場に降りてきて人間と一緒に楽しむと信じられている。

2. ガンマドヴァと山伏神楽の性格と異同

ガンマドヴァという単語は、ガン（Gam）＝村、マドヴァ（Maduwa）＝一時的に作られる屋根と柱だけの建物の意味である。しかし、一般的には、一つの村やいくつかの村が集団で行う神々を祭る行事を表す言葉である。ガンマドヴァは、五穀豊穡や無病息災を願って行う行事であるが、ガンマドヴァに関する神々を中心とした物語を音楽、歌、踊り、会話などを通して演じる点で、日本の神楽との類似性が認められる。ガンマドヴァでは、狂言に似たような物語や神話と関係する物語も多く

見られる。主にパッティニ信仰が中心になっているので、パッティニという女神の人生に関する物語、他の神々に関する話、過去の王に関する話や昔話が演じられる。

起源

ガンマドヴァの起源は、パッティニ神信仰と重なっている。パッティニ神は、インドのヒンドウ教の神で〔Adikaram 1946〕、パッティニ神に関する信仰は、スリランカでは2世紀頃から始まったものである。一方で、ガンマドヴァの中ではその起源が演じられるが、南インドのソリー（ケララ Kerala）国パーンヂ Pandi（セーラマーン Seraman）という王の時代まで（時代不明）さかのぼる。

ガンマドヴァの祭場とその風景

現在、ガンマドヴァは、村や神社の広場、又はスポンサーの庭で行われる。その場をきれいにし、白い砂をかけ、そこにマドア（大きな部屋）を建てる。壁はなく、切妻造の屋根が作られる。このマドアの中に、様々な葉でトラナ（Torana）という舞台背景が作られる。トラナは高さ3メートル横幅4メートルほどの平面で作られた装置で、その中央部分にパッティニ神の服が作られる（写真1）。その両側にガンマドヴァに登場する他の主要な神、デボル（Devol）神とワーハラ（Vahala）神のために棚が作られ、花などが供えられる。トラナの後ろに舞い手が準備をする部屋が建てられる。このように作られたガンマドヴァの舞台は、神々が天上から降りて来る清い場所とされる。

ガンマドヴァの構成

歴史的な資料によると、今から100年ほど前には、ガンマドヴァでは主な儀礼以外の35種類の演目（パンチス コールムラ）が一週間ぐらいかけて演じられた。

このパンチス コールムラは、パッティニ神の出生以前からの出来事、この信仰をスリランカに伝えたと言われる王に関する出来事、ガンマドヴァと関係のある他の神々に関する出来事などで構成されている〔Nevill 1888〕。この物語を35部分に分けた物語がガンマドヴァの演目として演じられたとされているが、現在のガンマドヴァではその物語から1つか2つしか行われていない。

ガンマドヴァの音楽

神々やヤカ（悪魔）との伝達的手段として、また神々への供え物として、ガンマドヴァでは音楽が使用されている。デボル太鼓（ヤクベラヤ）、ほら貝、舞手の足首に飾られているベル（ゲッジとパーダジャーラー）の音、歌（カヴィ）などが、ガンマドヴァの音楽の中心となっている。

ガンマドヴァの踊り

ガンマドヴァの踊りは、神々やヤカを楽しませるための主な手段であると同時に、見物人も楽しませる。具体的には、ガラーヤクマ（ガラ舞）、デボル神舞、ヴァーハラ神舞でそれぞれの踊りに含まれている物語は、見物人向けに作られたこっけいなものである。また、踊りは神々やヤカと交流する手段として神々やヤカの性格を具象化する手段として使われている（写真2）。

山伏神楽

神楽は日本の独自の民俗芸能であり、神道を基にして始まったといわれている。神楽は、多くの日本の村では神々を祭るために行われているが、その姿には地方によって違いがある。一般的に、神楽はガンマドヴァと同様に、五穀豊穡や無病息災を願って神々を楽しませることを目的として行われる民俗芸能である。神話から取り上げた神道の神々に関する物語や、歴史上のヒーローに関する物語、狂言など、歌、踊り、音楽、会話などを含めた民俗芸能である。

起源

神楽の始まりについては、古事記や日本書紀に、「アマテラスオオミカミ（天照大神）という天の神様が、弟のタケハヤスサノオノミコト（建速須佐男命）という海の神様の悪行に怒って、天の岩屋の中に隠し、戸を閉ざしてしまったため、天も地も真っ暗やみになってしまった。そこで、様々な災いが起き、大変困った神々が集まって相談し、アメノウズメノミコト（天宇受売女）という若い女の神様が、天の岩屋戸の前で足を踏み鳴らし、手ぶり身ぶりおもしろおかしく踊り、アマテラスオオミカミが天の岩屋から出られるきっかけをつくった」ということが書かれている。これが神楽の始まりで、現在まで代々伝えられてきたとされ

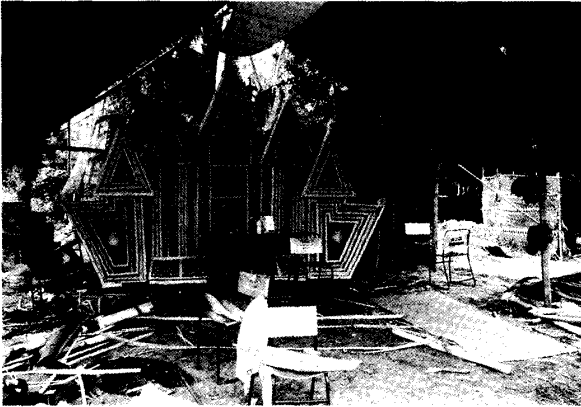


写真1 ガンマドヴァ祭場とトラナ



写真2 デボル舞 (ギニペーギーマ)

表2 神楽の区別



ている [Philippi 1968]。

日本では、地方によって数多くの種類の神楽が行なわれているが、それらを性格によって分類すると、表2のようになる。

本田安次によれば、「山伏神楽というのは奥羽山脈を境にして東側の陸中陸奥においては主に山伏によって行なわれたためこのように通称されている」という [本田 1942]。特に岩手、青森、秋田、山形の4県に分布しており、地方差はあるが全て山伏神楽の名で呼ばれている。さらに、同上書によれば、「山伏神楽は猿楽の能でもなく舞楽延年の類とも違っているが、それらの要素も少しずつそなえている不思議な儀礼を持った舞」であり、「火伏せや悪魔払いの祈祷に、その奉ずる権現の獅子頭をまわしながら」行った。これを門打という。

早池峰神楽

本研究の対象となっているのが、岩手県の山伏

神楽のうち大迫町、内川目村、岳集落の岳神楽と大償集落の大償神楽より成る早池峰神楽である。早池峰神山は北上山地の最高峰であり、信仰の対象としても知られている。早池峰神楽は早池峰山を霊峰として活動した山伏が伝えた神楽で、数多くの弟子神楽を持ち、山伏神楽の今の流派を形成している。

早池峰神楽の祭場とその風景

現在、早池峰神楽は神社の神楽殿、神社の会館、神楽の館、民家一般の会館などで行われる。早池峰神楽の幕は青色の厚布で、神楽団体の独自の旗になり、神社名、神社のシンボル、幕を奉納したスポンサー名などが書かれている。神楽の舞台は神々が天上から降りてきて人間と供に楽しむ清めた場所として考えられている。民家や神楽の館で行う場合 (写真3) と神社の神楽殿ホールや公民館などで行う場合 (写真4) とがある。



写真3 民家や神楽の館で神楽を行う場合



写真4 神社の神楽殿ホールや公民館などで神楽を行う場合

早池峰神楽の構成

山伏神楽は獅子舞を中心に式舞、神舞、荒舞、女舞、に分類される様々な演目から構成され、中世から近世にかけて諸芸能の要素を取り入れ、修験道流に再構成されたといわれる。早池峰神楽の構成にも以上の舞に関する演目が50ぐらいあり、門打ちの場合は続けて行なわれたとされているが、門打ちがなくなった現在の岳神楽と大償神楽は、神楽殿、神社の会館、神楽の館、他の会館などで公演する場合、12ぐらいの演目しか行なわれていない。

神楽の音楽

日本の神々に関する祭には、一般的に神と人との関係を表すために音楽（歌や踊り）が使われている。楽器と歌によって神々を楽しませ、踊らせるという考えは神楽にもガンマドヴァにも共通する。

早池峰神楽の音楽には山伏の影響が顕著にみられる。音楽のリズムに関しては、岳神楽の場合は五拍子であり、大償神楽は七拍子である〔本田1942〕。神楽の音楽は神楽太鼓、笛、てびらがね、神歌、シャモンの語り、舞手の足の踏み鳴らしや採物の音を含めたものである。

神楽の踊り

神楽の踊りは神々を楽しませることを目的としている。しかし、現在の神楽はこの宗教性だけではなく、芸術性も追求することによって芸能としてアピールしていると言えるだろう。それぞれの踊りに含まれている物語は、見物人を楽しませるために作られたものである。滑稽さを強調して観客に娯楽を提供している部分は特に大きく、こう

した点もガンマドヴァと共通していると言える。

3. ガンマドヴァと山伏神楽に対する人々の関わり

ここでは、ガンマドヴァと神楽に関わっている人々との面接調査やアンケート調査から、現在行われている民俗芸能がどのように運営実施されているのかを検討する。

ガンマドヴァに関する組織

スリランカの多くの村には、村落レベルのボランティア活動に関わることを特徴としている若者の組織がある。それらは日本の若者組に類似している組織で、地方によって村の様々な違いが見られ、主に二つの種類に分けられる。

一つは、1年中活動している組織でガンマドヴァだけではなく、村の様々な年中行事やボランティア活動に関わっている。

もう一つは一時的な組織で年中行事や他の祭のためにイベントを行うことを目的として活動する組織である。この組織は一時的なものなので、イベントが行われた後は消える。

後継者育成

スリランカの一般の学校教育では、中学校から高校まで伝統芸能の踊り、歌、音楽、などが選択科目として教えられているが、民俗芸能に直接関わっている人によって教えられることは少ない。民俗芸能に関わっていても、教師の資格をもっていない場合があるからである。伝統芸能に関する音楽や踊りを続けて勉強したい学生には、高校卒業後、ケラニヤ大学芸術学部（サウンドリヤ研究

所)で学士が取れるようになっている。ここで学士を取った人は、学校で踊りや音楽教師になる可能性がある。サウンドリヤ研究所で学士を取ってガンマドヴァグループに入った人や、新しくガンマドヴァグループを作った学生もいる。

学校教育以外では、ガンマドヴァの場合、伝統的なグループとカラーヤタナという二種類がある。

伝統的なグループというのは、踊り、太鼓、舞台装置などカーストによってガンマドヴァの役割ごとに組織化されたグループである。もう一つのカラーヤタナというのはカーストとは関係なく、集団でガンマドヴァなど民俗芸能を行う組織である。1950年代から始まったカラーヤタナは、民俗芸能の後継者家族を中心に構成されている。社会変動と共に、低い社会階層（カースト）の人によって分担された太鼓や舞台装置の協力が少なくなったことが、カラーヤタナの始まりの原因となったのではないかと考えられる。稽古するために特別な会館やリーダーの家を使用し、村人に踊りを教え、その中から、教師を育成する。

行政機関の活動

スリランカの民俗芸能の保存に関わっている行政機関は文部省、文化庁の二つである。文部省 (Ministry of Education) は、小学校から大学卒業まで民俗芸能などに関する音楽、歌、踊りなどを科目として教えられる教育制度やその教師を研修させる研修センターの運営、ケラニヤ大学芸術学部 (サウンドリヤ研究所) で研究者や後継者を育成することなどに関わっている。

文化庁 (Ministry of Cultural Affairs) は、分布しているカラーヤタナ、個人的に後継者を育てている民俗芸能などの関係者への経済的援助、伝統文化活動に関わっている人々の顕彰を行っている。S.L.B.C. (スリランカ放送局) による伝統文化の録音活動、外国で開かれる公演会などにガンマドヴァなど民俗芸能を参加させること、国民が代表する祭りには民俗芸能を参加させることなどに関わっている。

神楽に関する村の組織

早池峰神楽の場合は、国の重要無形民俗文化財保護の協力を基に、村落レベルから自然発生したいくつかの団体がみられる。

一つは、神楽保存会で、神楽の指導者、舞手な

ど、神楽に実際に関わっている人々の組織である。岳と大償神楽の保存会の主な目的は、神楽をそのまま保存伝承し続け、日本を代表する民俗芸能として人々に知らせること、神楽を通して村に活気を与えること、全国や外国との交流推進などである。活動として特に毎年行われる舞初め、夏祭りや舞納めの運営、招待される公演やイベントの運営、毎週2回の神楽の稽古、弟子後継者の育成、学校の子供達に神楽を教えることや、子供達を神楽 (しんがく) や芸能会などに参加させること、神楽に関する調査、記録、神楽に必要な仮面や衣装などの準備などである。早池峰神楽は神楽保存会が主体となって保存を推進しており、今日の社会ではどのようにして神楽の伝承や保存ができるのかということを考え、そのために様々な活動を行っている。その活動には、文化庁も協力している。

この他、早池峰岳神楽の観客による早池峰岳神楽後援会、大迫芸能保存会 (大迫郷土芸能保存団体)、早池峰神楽鑑賞ツアー企画委員会、早池峰岳神楽“春の舞”公演実行委員会、大償神楽“初夏の舞”公演実行委員会などイベントを支援する数多くの組織がある。

ガンマドヴァと神楽の背景となる村の組織には上述のように大きな差がみられる。ガンマドヴァの組織は神楽に比べて非常に少ない上、カラーヤタナには稽古や公演前に準備のために集めること以外の活動はみられない。つまり、定期的な稽古と単発的な公演に限られた活動であると言える。神楽の場合は、保存など決められた目的があり、それに合わせた計画や行動を行っており、行政機関の援助もある。スリランカの場合は行政機関が決めた方法によって民俗芸能などの存続においてわずかな援助がなされているが、神楽のように行政機関の援助を関係者の意見によって上手く使用方法はみられない。つまり、神楽の場合は下から上への意志疎通が上手く行われているが、ガンマドヴァではそれが上手くいっていない。その結果としてスリランカの民俗芸能の関係者は神楽の関係者のように伝統をそのまま存続させたいという願いがあっても、現実的にはきびしい環境にあるといえる。

後継者育成

日本の学校教育では神楽など民俗芸能や踊りに

関する科目はみられないが、地方のある学校では放課後などを利用して学校の時間以外に民俗芸能の踊り、歌、太鼓などを稽古している。スリランカの場合は学校教育の選択科目として民俗芸能に関する勉強は義務的なものになっているが、日本の場合は受験勉強から離れて自由に楽しめるものになっているのである。

早池峰神楽の神楽保存会はガンマドヴァのカラーヤタナに相当する。岳神楽はメンバーに対する稽古を週に2回行っており、そのために神社の会館や自分の家を使用され、保存会は代々から神楽を続けてきた長男しか新メンバーとして受け入れない。大償神楽の場合も同様に、週2回の稽古を行っており、神楽の館や民家が使用されている。後継者は最近まで長男だったが、現在、大償部落の多くは都会に勤めているためメンバーが足りず、家族以外からもメンバーを受け入れるようになっている。一方、カラーヤタナには世襲性はみられず、希望すれば誰でも入ることができる。

神楽と関わっている行政機関

日本の文化財保護政策は文化庁を中心として展開されている。文化財保護制度自体は明治時代にはじまるが、今日では保護の対象も拡大され、国と地方公共団体が連携して有形・無形の文化財保護にあたっている。また、今日では広く国民の文

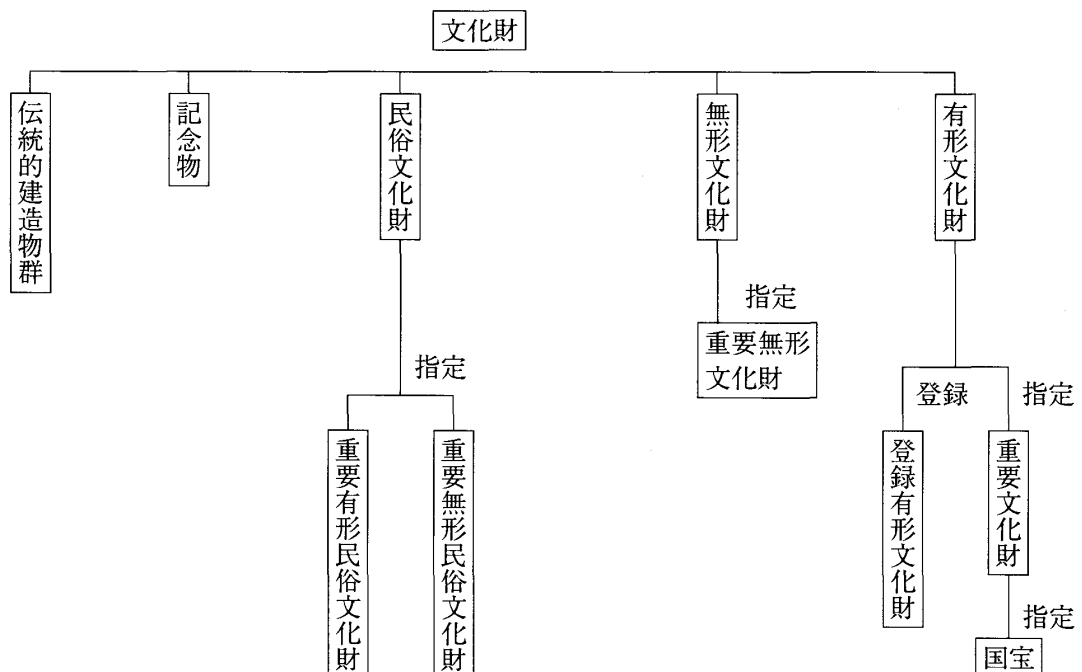
化財保護への関心を高めるために資料の公開や文化財活用を呼びかけている（表3）。「民俗文化財」とは人々の生活の中で生まれ継承されてきた有形・無形のものからなる。衣服、住居、年中行事や早池峰神楽のような民俗芸能もこの中に含まれる。これらの文化財は特に地域の生活と密接なつながりがあるため、その保護には地方公共団体の役割が大きくなる。文化庁も地方公共団体の行う保存・伝承事業に対する助成などを通じて協力を行っている。

早池峰神楽の場合は、大迫町教育委員会を通して村落レベルの組織を援助すること、大迫町教育委員会を通じて村落レベルの民俗芸能などを保存伝承するために村人を組織化していること、また大都市周辺で民俗芸能の公演を主催し、都会の人々に対して伝統文化に関する興味を深めること、海外公演の機会などで早池峰神楽を日本の民俗芸能として代表で参加させることなどが具体的な事業である。

4. 伝承に関わる問題

いつの時代にも社会の変化と共にそれが担う文化も変容し、あるいは消滅していることはいうまでもない。しかし、我々の時代において、文化的なものの消滅の原因またはそれを防ぐための努力

表3 文化財の分類体系



の背景は、以前より複雑になっているのではないかと考えられる。この問題を経済的、社会的、宗教的要因の3つに分けて考えてみたい。

経済的要因

日本と比較すれば、スリランカにおける経済的な問題が民俗芸能の存続に大きな影響を与えているのは明らかである。

ガンマドヴァは、近年まで行う人にとって生活手段ではなかった。彼らは普通の農民であり、収穫後、招待された所で、村人が集まり、神々に感謝し、五穀豊穡や無病息災を願うためにガンマドヴァを行なった。しかし現在ではそのような世襲の家は少なくなり、ガンマドヴァだけでなく他の神々や悪魔に関する祭りをを行う職業的なグループがつくられている。彼らは、招待される側に合わせて祭りや行事を行い、スポンサーや招待される側からもらえる穀物や、僅かな金で満足したが、最近では注文される踊りや演目の数によって決まった費用を指定するグループもある。多くのグループが職業としてガンマドヴァを行い始めてから、ガンマドヴァの形態が変わってきた。特に、ガンマドヴァを行う目的は、娯楽的な部分が取り除かれ、神々から安全や無病などを願う信仰的な部分が大きくなっている。そのことから人々の不安の高まりと共に関係者が宗教的に権威も持ちつつあるということが伺われる。それは、関係者に対するアンケート調査でガンマドヴァに関わっている理由は何かという質問に対する答えからも明らかである（図1）。

このようにガンマドヴァの芸術的な部分を捨て、信仰的な部分も即物的な面で超自然的なサポートが得られると思われる部分が大きくなっている。このことは観客への面接調査からも伺える。物質的な豊かさを求めることや現状への不安などが人々をガンマドヴァなどに向かわせており、民俗芸能から娯楽的な性格が少なくなり、信仰的な面がより強調されている。

これに対し、早池峰神楽の関係者は戦前神楽だけで生活してきた。年に3回行われる早池峰神社の祭り以外に村落で稲を取った後、その感謝のために早池峰神を表す権現様を村落に招き、行われる門打ちという行事があった。そこでは、神楽の舞手によって悪魔祓いや、清めの祈祷が行なわれた。家々を回り、悪霊を追い払い、約2ヶ月間行

われる門打ちで得られる穀物や食べ物は、神楽グループやその家族の年間の生活に十分な量だった。戦後神楽に関わる人が減ったことなどから、現在神楽は年に3回行われる祭りだけになり、門打ちがなくなった。こうして、神楽の人の生活手段は、神楽から他の職業に変わっていった。

しかし、早池峰神楽は消えてはいかなかった。現在では、村での行事以外に神楽に関する公演やイベントが多くなっている。神楽は年中行事として人々の生活に密着したのからイベント化することによって生き延びたのである。

現在神楽を行っている神楽保存会では、公演やイベントでもらえる礼の金（花）の1/3は、保存会の運営のため貯金し、2/3は保存会のメンバーに分配される。早池峰神楽が国の指定を受けてからの補助金も貯金され、その中から舞手の衣装や道具、公演の準備金がまかなわれる。このように現在では神楽は生活手段ではなくなっている。

現在早池峰神楽の後継者の多くは大迫町の役場や村に近い行政に関する職場に勤めている人である。なぜならば、神楽保存会のメンバーであることは、大迫町の役場や村に近い行政機関に就職する際に有利な条件になっているからである。彼らは就職のために神楽を続けているわけでは決していないが、このシステムは行政側が神楽を存続させる手段として一定の役割を持っているとも考えら

図1 関係者がガンマドヴァに関わっている理由

アンケート調査における具体的解答例

- ① 代々、伝わってきた我々の伝統だから
- ② 踊りや音楽に関わるのが楽しいから
- ③ 職業として
- ④ 人々を危険や病気から守ることができるから

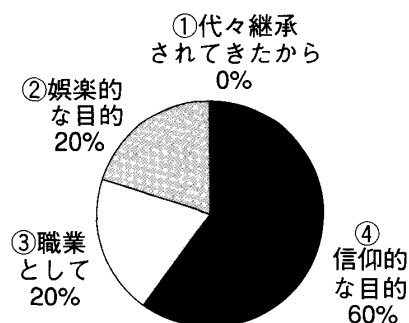
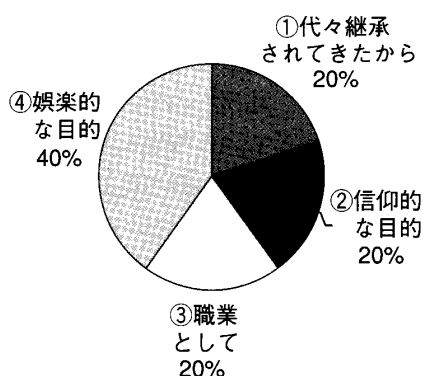


図2 関係者が神楽に関わっている理由

アンケート調査における具体的解答例

- ① 代々、伝わってきた我々の伝統だから
- ② 人々を危険や病気から守ることができるから
- ③ 職業として
- ④ 踊りや音楽に関わるのが楽しいから



れる。このような社会変動に伴って、以前の生活手段として信仰を中心に行われてきた神楽が、現在では興味あるいは娯楽を中心に行われることになった。それが、で神楽の関係者に対するアンケート調査でも伺える（図2）。

神楽が生活の手段でなくなったことが、逆に人々を神楽に向かわせたとも言える。公務員などの職業について一定の収入があり、経済的に余裕ができたことが、代々から伝わってきた誇りを自分のものにしたいという考えを生み出したのではなかろうか。

社会的な要因

次に社会的要因として、カーストがあげられる。ガンマドヴァや他の民俗芸能に関わっている人々はシンハラ文化による様々な階層の人に含まれている。ガンマドヴァにおける様々な役割を果たす人々もカーストに分かれているのである（表4）。

近年まで、シンハラ人は、社会行動における自分の役割として、その階層を扱っていた。自分が低いカーストにいることも、それが社会において自分の役割を表す当たり前のことだと考えていた。しかし、近代化と共にカーストは社会によって決められた差だという考えが広まった。そして、カーストの低い人は自分のカーストを隠そうとしたのと同様にガンマドヴァなど民俗芸能を行う人々

も、祭場以外のあらゆるところで、自分が民俗芸能に関わっているということを隠すため努力した。現地調査で、自分の子供たちを民俗芸能に関わらせまいとする人達や、ガンマドヴァに関わっている自分の父親を止めさせようとしている若者にも出会った。

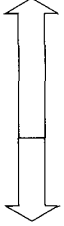
早池峰神楽の場合は、社会階層の差はみられない。神楽の人達は、村落の五穀豊穡や無病息災を叶えてくれる人であると同時に、全国的にも、国際的にも村落を有名にしてくれる人である。

その点でも、神楽はガンマドヴァと違って、人々の尊敬を受けている。そのため、自分が神楽の関係者だということを自己紹介とともに付け加える人が多かったのはガンマドヴァとは対照的である。

また、外国からの影響も大きな要因である。スリランカは、1505年から1602年まではポルトガル、1602年から1815年まではオランダ、1815年から1948年まではイギリスからそれぞれ植民地支配を受けていた。その間、数多くの民俗芸能が消えてしまった。スリランカが何カ国にも植民地支配されたことによって、スリランカの人々が精神的に受けた影響は大変大きい。特に1815年から1948年まで133年間に及ぶイギリスによる植民地支配は、支配者であるイギリス人を尊敬すべき存在とただだけでなく、西洋の文化を取り入れることによって自分も尊敬されようとする努力を人々に促した。こうした内面的変化と共に植民地支配は制度も変えた。特に都会の学校では小学校から英語教育が重視され、英語のできる人は管理職になり、社会的にも尊敬を受け、新しい上層階級ができた。これにより、シンハラ語とシンハラ文化を大切にしている人々が、下級の人々として軽視されるようになり、民俗芸能関係者は結婚相手として選ばれなくなった。近代の教育を受けた新しい世代の若者はイギリスの植民地下の影響によって流入した英語の演劇、映画やテレビドラマなどに熱中し、かつて祭り等の立役者として尊敬された人々が疎んじられるようになった。こうして、シンハラ文化やスリランカの独自性に関する意識は人々から失われていった。

以上から神楽とガンマドヴァをとりまく社会の相違が、伝承する当事者に大きく影響していることがわかる。伝統文化の担い手として、社会から期待され尊敬されている神楽の人々と洗練されない田舎くささを感じさせるガンマドヴァに関わる

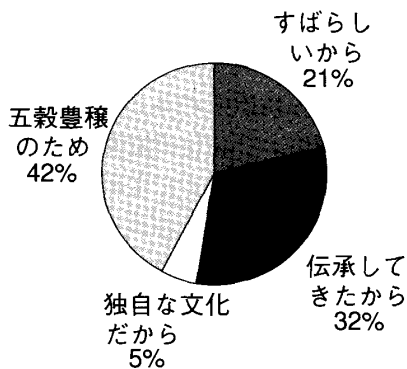
表4 ガンマドヴァにおけるカースト

上位カースト		舞手——ゴイガマカースト
		太鼓奏者——ネカチカースト
		飾りをする人——ベラワカースト
		必要なお菓子など食べ物を作る人——ヴァフンプラカースト
下位カースト		祭場飾るために必要な布など用意する洗濯屋——ラダーカースト

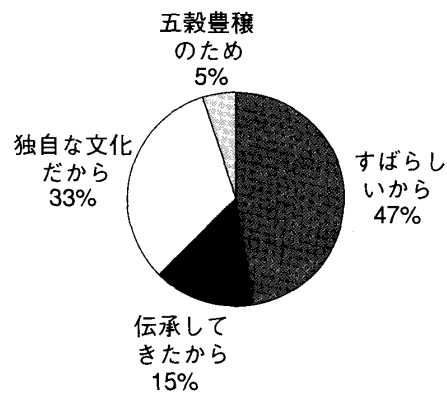
〔Ariyapala 1956〕

図3 なぜ民俗芸能を伝承していきたいのか

ガンマドヴァ



山伏神楽



人々との意識の違いは歴然としている。

宗教的な要因

ガンマドヴァの存続には宗教的な問題も影響を与えている。ガンマドヴァは、パッティニ神を中心に行われる行事であるが、この信仰の対象が1980年代以降カタラガマという神にとって代わられるようになってきている。これはカタラガマの方が神の序列の下位に位置し、人々に接する機会が多く信者を助ける力が強いという考えがあるため、前述の即物的な利益を求める信仰への傾倒を裏付けている。こうした信仰の対象に変化が、ガンマドヴァそのものの姿を大きく変えており、そのままの姿を保存しようとしている神楽とは大きく異なる。アンケート調査の結果からも明らかのように、現在の神楽には信仰はそれほど重要視されていない。ガンマドヴァと山伏神楽の被験者全てがなぜ民俗芸能を伝承していきたいのかという質問への答えは図3の通りである。民俗芸能の背景には民俗信仰が主に関わっているということが明らかであるが、神楽の現在を通してみると、

信仰が民俗芸能の伝承に直接影響を与えているとは言えない。

私は伝統芸能というのは民俗芸能や民俗行事をもとにしてその要素を取り入れながら新たに作られたものであると考えている。娯楽的な目的を中心にしてるので芸術的なものにもなっている。また行なわれる時期が決まってない伝統芸能を演ずる人も専門家である。あるいは経済的や社会的発展と共に独自のものや国民文化として新たに作られたものである。これに対し、民俗芸能というのは民俗行事として信仰に基づいて行なわれてきたものなので、古い時代の面影をとどめたものが多く残されている。年に一度、二度あるいは数度など決まった時期に行われていることも特徴である。

早池峰神楽も人々の信仰が薄れていったことから、娯楽性が目立つようになると同時に、神楽は自分の村のもの、あるいは国の誇りとして考えるようになった。

戦後、神楽の関係者の減少や経済的な理由によって、門打ちが行われなくなった。現在、信仰の

名残がある神楽は、舞初め、夏祭りや舞修めぐらいだらう。一方、今日では、神社以外の都会や海外でのイベントや公演会增加している。それはもはや地元の神社で行なう信仰性を主にした民俗芸能ではなく、芸術性の高い伝統芸能である。伝統芸能化されるということは早池峰神楽を例にすると、地元（神社）から離れて行われること、民俗芸能段階で行なわれた演目の減少、現代の人々を喜ばせることのできるものを残し、他に新たなものを加えること、時間の短縮化など見なすことができる。社会変動の中での民俗芸能が伝統芸能へと変容していく事態は、他のアジア諸国にもみられる。また、多くの諸国の演劇の背景にも民俗芸能、祭儀や儀礼などがみられることから社会変動の中で民俗芸能は伝統芸能に質的变化をとげ、最終的に日本の能のような独自の演劇の形態を創るエネルギーになりうる可能性があるのではなかろうか。日本と比べると、スリランカに残っている民俗芸能が伝統芸能という形に発展しなかったことが、それらの減少の原因の一つではないかと考えられる。

このように山伏神楽は信仰性の深い民俗芸能という立場から信仰性が薄くなった娯楽性や芸術性が目立つようになりつつある。それは現在日本社会の必要性に応じた変化かもしれないが、神楽の形式や舞い方は直接影響を受けてはいない。

おわりに

ガンマドヴァと山伏神楽には様々な共通点が現れたが、逆にそれらの現在に至るまでの変容の要素にはいくつかの相違点も見られる。その相違点は経済発展や教育という外的な要因と両者の構成や信仰性という内的な要因として大きく2つに分けられる。

日本はスリランカに比べて経済的に大変発展している国である。それによって日本人は多忙な生活を送っている。しかしそれが逆に昔の伝統を楽しむことに日本人を向かわせたと考えられる。早池峰神楽の観客の約40%が東京や周りの都会からの人で、約40%が周りの村の人で、約20%が村の人であった。早池峰神楽を見物するために都会から来た人々との面接調査によると、忙しい仕事や都市化に疲れているので故郷の温かさに囲まれた日本の伝統を楽しみたいと答えた人が多かった。

ガンマドヴァの場合は楽しむために見物する人の数は少ない。見物人の多くは信仰的な目的を持っていた。例えば、子供の無病や安全、自分や家族の安全、無病、幸福や豊作や商売繁盛を願い、神々に感謝し、お礼を供えることなどである。

このように現在ガンマドヴァの場合は日常生活の様々な問題を解決することを目的として見物する人が多くみられるが、山伏神楽の場合は逆に娯楽のために見物する人の数が多い。これは、スリランカのガンマドヴァの観客の多くは日本のように豊かな世界に住んでいるものではなく、日常生活での困難な状況や不安に囲まれていることが理由であろう。もう一つの理由は、映画、演劇、テレビドラマなど多くの娯楽が広まっているからではないかと考えられる。

しかし日本では娯楽が多く広まっているのにも拘わらず、神楽の娯楽性が重要視されている。現在の日本人は他にも多くある娯楽的な手段とは別のペースで神楽を楽しめるのである。それは神楽の原形を留めたいということも関係する。これは、神楽保存会やその他の組織の目的によっても分かる。そして、豊かになった日本人にとって神楽はスリランカのガンマドヴァのように生活の困難に助けを願うものではなく、伝承として尊重する対象として、またふるさとの静かな楽しみを味わう対象としてとらえられていると考えられる。

教育的にも日本とスリランカには大きな差が見られる。最初にスリランカの文化的な様相を理解しようとしたのは西洋の学者たちであり、その研究は文明人が未開の文化を調べるようなものであった。

日本では西洋的な研究と同時に明治維新後、日本民俗学という独特な研究も発展してきた。柳田国男のような学者達の導きによって研究を始めた学者達が全国に分布しており、民俗学的な研究が日本文化の存続に与えた影響は非常に大きいのではないだろうか。例えば、早池峰神楽に関する詳しい研究を始めた本田安次氏の研究は早池峰神楽の存続や全国や外国まで有名になる原因になったと言われている。

また、今日では民俗芸能を映像によって記録する方法が定着してきている。例えば、静岡県は、このビデオ作成にあたって制作委員会を設けて民俗芸能研究者を取り込み、ここで台本作成してビデオ会社に委託し、研究者が作成の現場に立ち会

うという形を取っており、ビデオの他にガイドブックが付けられている。博物館も、近年では独立したビデオブースを作るなどして来館者が自由に視聴できるようにしている。またNHK放送局による「ふるさとの伝承」も、民俗芸能の保存に大きな手がかりになっている。要するに日本では民俗芸能は、「映像民俗誌」の時代に入っているといえる。

この他、文化庁は1989年から各都道府県教育委員会に国連補助金を交付し、都道府県別の『民俗芸能緊急調査』を実施している。なお、文化庁は『民俗芸能緊急調査』と同じく『祭り行事調査』も同様に実施している。出版社おうふうが刊行している都道府県別『祭礼行事』『祭礼辞典』なども、全国的な県別民俗誌の一つである。このようなものは先にあげたNHKの「ふるさとの伝承」と共に日本の民俗芸能の伝承保存に与える影響は非常に大きい。さらに、大学や民俗博物館による民俗学的な研究の発達も日本の伝統文化の重要性が全国に認識されるものになっている。

このように日本では教育を受けた人々の関わりによって、神楽などを含めた伝統文化が政府からも重要視されており、さらに、国内外の人々からも注目されるものになっている。見る側も自分の文化を代表するものとして神楽を大事にし、あるいは自分の歴史上のものとして味わった。行なう側が以前地方の観客だけに限られていた神楽が、研究者や政府によって有名になり、日本を代表するものまでになり、経済的な利益がなくても神楽を大事にしなければならないという意識を持つようになってきているのである。

スリランカでは民俗芸能が数多くて消えつつあるが、それらの一つだけでも詳しく検討された研究はみられない。教育を受けた人々からもスリランカの伝統文化は疎んじられ、政府や一般の人々からもそれらの存続に向けての動きが始まっていない。

内的な相違点に関して私はガンマドヴァと神楽の構成や内容に現れる信仰性の違いに着目したい。ガンマドヴァと山伏神楽を構成している演目の比率を調べると、両者の構成上の違いが浮かび上がってくる。即ちガンマドヴァの演目構成にはより強い信仰性がみられ、他方の山伏神楽には割合的により強い娯楽性をみることができる〔Nandana 2000〕。

歴史的資料を参考にすると、ガンマドヴァの場合、信仰的な神の踊りや悪魔の踊りあるいは様々な行事は減少せず、現在でも行われているが、約100年ほど以前、演じられたパッチニ神に関する35の娯楽的な物語が現在では行われなくなった〔Hevawasam 1974〕。その結果として現在のガンマドヴァは信仰性が目立つようになり、その形が変わった。しかし、山伏神楽に関する歴史的な資料〔本田 1942〕あるいは現地調査から現れた情報によると、たしかに以前に比べて娯楽的な演目の数が減ったが、現在でも以前と同様に娯楽的な演目の数の方が圧倒的に多いので相対的に見るとそれほど形は変わっていない〔Nandana 2000〕。

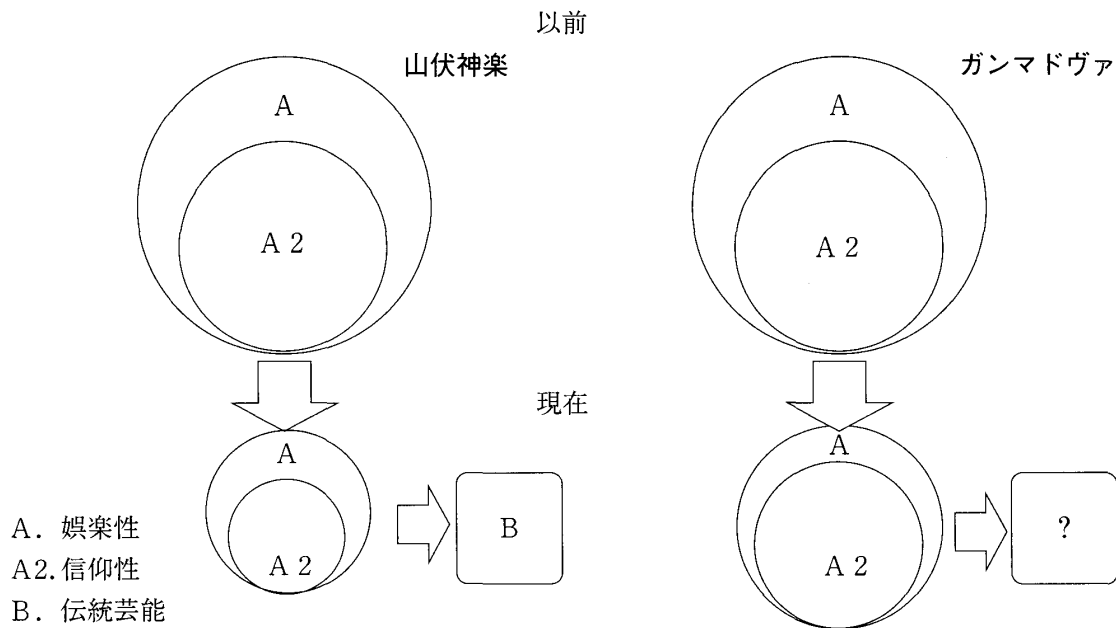
以上のようにガンマドヴァと山伏神楽は同じ民俗芸能だが、変化の様子及びその背景にある人々の意識、取り組みなどに大きな違いがみられる。日本人は神楽を伝統芸能という枠組とまた民俗芸能という姿で残そうとしている。例えば、地元以外の都会や外国ではイベントやショーとして娯楽を目的とする観客の前で行なわれ、地元では信仰を中心とした形で信仰心を持った観客の前で行なわれる。その取り組みには文化財保護、村落レベルの組織、経済的や教育的豊さなど多くの要素が関係している。早池峰神楽の形は大きく変化せず、存続している。

ガンマドヴァの場合にも村落レベルの組織や様々な性格などを見出すことはできる。しかし、ガンマドヴァは伝統芸能として対象化されることはなく結果として形の変化が引き起こされている。両者の形の変化は図4のように表すことができるだろう。

ガンマドヴァを保存しようとするのであれば、それを伝統芸能として意識化し、対象化するような制度的条件が不可欠である。しかしこれには植民地支配以降の自国の文化を卑下するような態度が、大きな障害となる。つまり単にガンマドヴァを文化財として指定し、資金援助をすれば良いと言った小手先の政策で解決する問題ではなく、今日のスリランカにおける自国文化全体の再評価の中でこそ、ガンマドヴァの形は保存されていくのではないだろうか。

それと同時に、保存の意味そのものを考えなおすことも求められている。ガンマドヴァはたしかに形に変化をきたしているが、信仰という点で都市部ではその開催がむしろ増加しているという事

図4 ガンマドヴァと神楽の形における変容



実がある。つまり、山伏神楽の場合とは質が異なり人々の生活にとってガンマドヴァは必要とされ、形を変えながらも生き続けているのである。ここでは政策的な意味での保存あるいは人為的な保存とは別の視点が求められる。伝統芸能として対象化され保護されるわけでもなく、形を変化しているガンマドヴァが、それでも根強く人々の生活の中で存続している理由は何なのか。現代のスリランカの社会状況という広い背景の中で改めてこの点を検討する必要がある。

参考文献

Adikaram, E. W. 1946 *Early History Of Buddhism in Ceylon*. Colombo, Gunasena Press.

Ariyapala, M. B. 1956 *Society in Mediaeval Ceylon*, Colombo, Department of Cultural Affairs.

Geiger, W. trans. 1960 *Mahavamsa : The Great Chronicle of Ceylon*. Colombo, The Government Information Department, A.N.C.L .

本田安次 1942 『山伏神楽・番楽』 錦正社

Hevawasam, P. B. G. 1974 *Pantis Kolmurakavi*. Colombo, Pradipa Prakasakayo.

Nevill, H. 1888 *The Story of Kovalan*. Taprobanian, Februry.

Nandana, J. A. 2000 「ガンマドヴァと山伏神楽を中心に—祭礼の継承に関する比較研究—」 『比較民俗研究』 第17号、筑波大学比較民

俗研究会

Obeyesekere, G. 1982 “Social Change and the Deities : The Rise of Kataragama Cult in Modern Sri Lanka”, *Man*, N.S. 12.

— 1984 *The Cult Of the Goddess Pattini*. Chicago. University of Chicago Press.

Philippi, D. trans. 1968 *Kojiki*. Tokyo, University of Tokyo Press.

Sarachhandra, E. R. 1952 *The Folk Drama of Ceylon*. Colombo, Department of Cultural Affairs.

— 1968 *Sinhala Gemi Natakaya*. Colombo, Department of Cultural Affairs.

コメント

本論文はJ. A. ナンダナ・ジャヤコディ氏が2000年3月に筑波大学大学院地域研究研究科に提出した修士論文のダイジェストである。氏は来日以来、母国スリランカにおける祭礼や民俗芸能の保存・継承に強い関心をよせ、そのため、母国の祭礼、とりわけガンマドゥヴァと一般に呼ばれている村落での豊饒祈願を目的とした村祭りの実態調査を精力的におしすすめてきた。その背後には、今日、スリランカにおいて、近代化に伴う地域社会の変化とともに、かつて生活に密着して展開されてきたこれらの祭りや、その中で演じられてきた民俗芸能が、急速に衰退し各地で消滅の危機にさらされ、しかもそれに向けての対策が殆どとられていないという事実に対する氏の熱い想いが存在している。

氏はこれらを現代においていかに継承し、保存できるかを模索するため、日本の無形文化財保存運動の実態をあわせ検討するべく、これが比較的 successful している岩手県早池峰山麓に伝承されてきた山伏神楽系の岳神楽および大償神楽の地域での保存運動をとりあげ現地調査をする中で、検討をすすめてきている。

保存・継承という視点から、スリランカのガンマドゥヴァと日本の山伏神楽を比較することで、両芸能およびそれをとりまく文化的環境の異同より、ガンマドゥヴァには信仰的要素がなお強く残存しているのに対し、山伏神楽には、現代における日本人の精神的生活を潤す娯楽的要素が強く志向されている点に注目し、組織員の継承に対する意識や態度そして公演の方法、さらには、支援組織のあり方などより、保存運動の有効性を検討している。また、両国における学校教育の中での民俗芸能習得の相違にも着目している。

氏も指摘しているように、こうした現象の相違の背後には、両国における近代化過程の中での伝統文化認識にかかわる政治性が伏在していることも事実であり、氏の論点が単に母国の民俗芸能や祭礼の保存、継承のための技術的問題にとどまることなく、近代化の中での伝統の再生という、より大きなフレームへの展開へと導く内容をもっていることを強調しておきたい。

(高桑 守)